

# 全科協

vol.49 *News*

NO.6

2019年11月1日発行 通巻第289号

特集  
SNSの活用

## CONTENTS

P2 ▶ 特集

P10 ▶ 海外博物館事情

P12 ▶ 11月12月の特別展等

P14 ▶ リニューアル情報

P16 ▶ トピックス

JCSM  
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898

<http://jcs.jp>

# SNSの活用

検索ワード

スマートフォンの普及にともない、ソーシャルメディア（SNS）の利用は年々拡大しており、企業はもちろん、公的機関などでもそれを活用した情報の収集・発信は欠かせないものとなっている。博物館でも、おもに動物園、水族館、美術館でそれを積極的に活用した広報活動が進んでいるが、科学系博物館での取り組みは相対的にやや遅れている印象がある。全科協ニュースでは、平成26年のVol. 44 No. 5（通巻第258号）でSNSを特集しているが、それから5年を経過し、再度取り上げることにした。浮沈の激しい分野であり、この期間にSNSをとりまく状況は変化しているのに加え、その活用方法などにも新機軸が生まれているのではないかと考えたからである。実際、5年前は日本語アカウントが開設されたばかりだったInstagramはその後の成長が著しく、“インスタ映え”という流行語（すでに古いという意見もあるようだが）が生まれるなど主要な地位を占めるようになっていし、最近ではTikTokも人気拡大しており、公式アカウントを開設した水族館も現れている。一方でいまだ独自のアカウントさえ持っていない施設も少なくないが、SNS活用が有効に機能した事例を蓄積し、問題点も含めて現状を今一度振り返っておくことが、そうした状況の解消につながってゆくものと思われる。

本特集では、日本各地の施設でのSNS活用状況について概観するとともに、試行錯誤を重ねながら発展させてきた情報発信のやり方と博物館に欠かせない調査・研究活動におけるSNS活用の事例を紹介いただいた。さらに、博物館と関わりの深い情報技術の専門家により、SNSを活用するうえでふまえておくべき基本的な考え方を整理していただいた。さまざまな視点からの特集記事が、多くの施設でSNSの有効活用に生かされることを願うばかりである。（編集委員 平田 慎一郎）

## 博物館をとりまく SNS 事情

<https://www.facebook.com/biwahaku>

滋賀県立琵琶湖博物館  
主任学芸員  
金尾 滋史

### SNSの普及による時代の変化

現代はSNSの時代と言われている。SNSの動きによって、人々やメディアが動く場合もある。情報がよい方向に拡散することもあれば、悪い方向へ拡散することもある。それだけSNSが影響力を及ぼすようになった時代と言われる。情報発信と収集、コミュニケーションはホームページやインターネット掲示板から始まり、ブログを経て、TwitterやFacebook、InstagramなどのSNSへと拡大してきた。現在主要となっているSNSが国内で普及しはじめて、おおよそ10年が経過し、博物館のもつ情報や価値を発信するツールとして、もはやSNSは見逃せないものとなっている。

著者は、博物館の広報担当として、館公式SNSでの発信を行っている一方で、個人としてもSNSを活用して研究や博物館活動に関する情報収集と発信を行ってきた。そのような中で見えてきた博物館をとりまくSNS事情について紹介していきたい。

### 全科協加盟館におけるSNSの利用状況

現在、博物館や科学館にとってSNSはどのように活用さ

れているのだろうか？全科協加盟館220園館（2019年8月現在の正会員数）におけるSNSの利用状況をまとめてみた（図1）。ホームページ上などから把握できた範囲ではあるが、7つのSNSを活用している館もある一方で、まったく使用していない館もあった。最も多く利用されていたのはFacebookであり、これにTwitterが続いた（図2）。この2媒体は併用している館も多かった。このほかInstagram、YouTube、LINEをいくつかの館が利用していた。

内容は各館のSNS使用ポリシーやガイドラインに基づくものであるため、それぞれの用途は異なるが、多くの館の場合、SNSは情報発信や広報のツールとして利用していることが多い。更新頻度としては毎日更新のところもあれば、1週間に1回程度、さらに一部では放置状態になっている場合もあった。これらはいわゆる「中の人」による各館の担当スタッフの体制や他の職務との兼ね合いもあるだろう。また、投稿に対するコメントについて、返信をするところもあれば、返信をしないという対応も館によってそれぞれ異なっていた。

著者の所属する滋賀県立琵琶湖博物館の場合、現在は

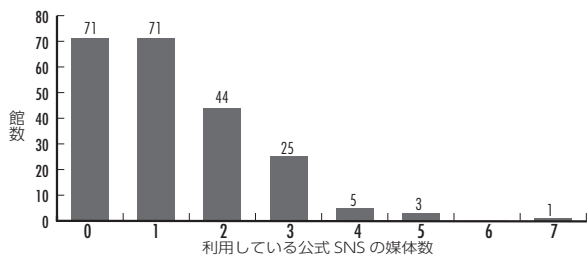


図1 全科協加盟館が利用している公式SNSの媒体数。主に各館のホームページ上で確認できたものを中心とし、その他に各SNS媒体で検索を行い、公式と判断されたものをデータとして使用した。

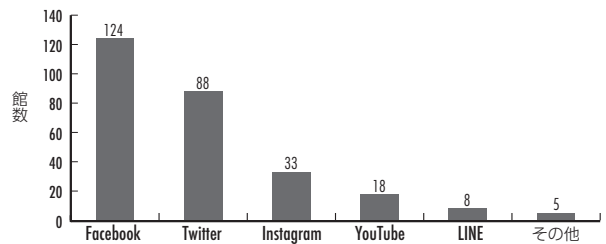


図2 全科協加盟館が利用している公式SNSの媒体。複数のSNSを利用している館はそれぞれの媒体ごとにカウントをした。その他にはmixi、Ustream、niconico、Viberが含まれる。

著者が博物館の公式Facebookページの更新を行っており、公式Instagramは別の職員が担当している。投稿内容は主に、博物館の出来事、催し案内、博物館活動などを紹介するほか、時に水族展示の生物や各展示室の展示などについて紹介を行う。現在、当館公式Facebookページのフォロワー数は約3,200人で、爆発的に人気のある投稿などはないものの、飼育生物を極端に擬人化するような表現などは使用せず、あくまで当館の理念に従った内容にとどめている。

#### 情報発信のツールとしてのSNS、その光と影

このようなSNSによる発信は、不特定多数の人の目に触れることから、もちろん広報的な意味は大きい。また、インパクトのある写真や動画を投稿することは、「非日常」や「あるある」などの共感を呼び、多くの情報のシェアと拡散が起こる。そして、思わぬところで注目を浴び、いわゆる「バズる」状態になることもある。そのような意味では、SNSによる情報発信は、バーチャル展示室といっても過言ではないだろう。そして共感する人がいれば、その人も情報発信に加わってくれる。何気ない投稿から「何が起こるかかわからない」のがSNSの特徴だ。また、Yahoo!リアルタイム検索をはじめ、TwitterやInstagramでの検索で、自分の館がどのような内容で話題にされているかを検索することもできる。もちろん、これらが利用者の母集団すべてを形成する訳ではないが、定期的にチェックをすると、より利用者や潜在的利用者、社会での反応がわかるだろう。この点については岡本氏の寄稿を参照いただきたい。

一方で、「何が起こるかかわからない」からこそ、情報が断片化して捉えられてしまう場面もある。投稿した内容が本来の投稿者の意図とは別の意味で解釈され、誤解を招く場合もあり、場合によっては炎上することもある。各館で運用ポリシーなどを決めて対応策なども検討しているが、まだまだ炎上案件の収束などに至っては課題も多いのが現状である。

#### 資料収集や調査研究のツールとしてのSNS

さて、各館にとってSNSは広報やPRの場としての利用が多いと考えられがちであるが、博物館の重要な役割である研究や資料の収集・保存にもSNSは大きく貢献するよう

になった。公式SNSとは少し離れるが、福岡市の河川で「マンボウがうちあがっている」という一般の方からのTwitter投稿がきっかけとなり、その後、博物館の研究者がその情報を得てスピーディーに動き、死亡個体を回収した。そのマンボウは国内でも淡水域での記録が数少ないヤリマンボウという種であり、現在は博物館の標本となっている(Sawai et al, 2019)。このように博物館資料としても、学術的にも貴重な記録を残すことができたのも、SNSという即時の情報発信とそのコミュニケーションが成せる現在ならではの手法だったのではないかと考えられる。

著者もSNSに投稿されていた画像が、希少種や外来種の重要な分布情報となったことを何度も体験している。このようにSNSに投稿された情報に対して「価値づけ」を行い、それをデータとすることも博物館のひとつの役割といえる。一方では、積極的にSNSを利用して、データを集めることも行われている。これについては石田氏の寄稿を参照いただきたい。

#### 博物館スタッフ個人による発信と情報収集

最後に、各館の公式SNSに加えて、あくまで個人的な立場としてではあるが、学芸員をはじめとする博物館スタッフのSNS発信力にも注目したい(佐久間, 2018)。これまでもさまざまな話題や議論が行われてきたが、その一例を紹介しよう。9月上旬に京都で開催された、ICOM(国際博物館会議)京都大会において、「博物館の定義」の決議が議論された。私自身も最終日である9月7日の臨時総会を傍聴しており、その議論を目の当たりにしてきた。その一方で、参加していた国内の博物館関係者が現場で実況ツイートを行っており、その日の夜にはまとめのサイトもできた(<https://togetter.com/li/1400853>)。あくまで個人のメモという位置づけであるが、報道では伝えられていない臨場感あふれる実況であったため、プロセスも把握でき、参加できなかった人達にとっては有益な情報を得ることができたのではないかと考えられる。公式SNSと個人SNSの扱いについてはさまざまな議論がなされているが、このような博物館スタッフ個人の情報の発信と収集、そしてそこから生まれる議論やコミュニケーション、情報交換は、博物館活動の発展において大きな役割を果たしていくであろう。

## おわりに

本稿ではSNSと博物館に関わる全体像と、いくらかの具体的な事例を紹介してきた。今後、SNSがどのように発展・衰退していくのか、そして、それらは博物館活動としてどのように活用できるのだろうか？驚くほど速いスピードでさまざまなツールが入れ替わるこの時代だからこそ、それらに柔軟に対応できるように、各館の理念と照らし合わせて、SNSとうまくつきあうことが望まれる。

## 市民科学にTwitterを用いる利点と課題 — #カキ調査を例として

大阪市立自然史博物館  
石田 悠

科学調査において、特にそのデータの収集で市民の協力を得る手法は市民科学 (Citizen Science) と呼ばれる。生物の分布調査など、地理的に広い範囲のデータを集める際に有効な方法であり、参加者がそのテーマを学ぶ機会になる普及教育の効果も併せ持つ。博物館・科学館にとって、市民科学はその活動と親和性が高い。すでに各地の館でさまざまな事例と成果が蓄積されている。

近年、SNSがすっかり社会に浸透した。その一つ、Twitterを利用して市民科学を展開する例が増えてきた。Twitterは投稿の共有・拡散がしやすい、ユーザどうしが気軽につながりやすいなど、情報収集に極めて有利な機能を持つ。一方で、情報のコントロールを中心に従来にない留意点も必要になっている。本稿では、筆者が2016~2017年に行った「スーパーの『かき』の産地しらべ」を中心に、他の事例も交えながら、市民科学にTwitterを用いる利点と課題について考えてみたい。

### スーパーのかきの産地しらべ

大阪市立自然史博物館では2012年から5年間、市民参加と博物館広域連携による瀬戸内海の総合的な自然史調査事業を行った。その一環として、瀬戸内海で水揚げされる魚介類が、全国のどの範囲まで流通するかに関心を持ち、市民科学的に調べてみることにした。同館友の会会員などに呼びかけ、全国のスーパーで瀬戸内海産の魚介類が売られていたら、その店名と、魚種、産地、日付を教えてもらい、魚種ごとの産地の多様性や流通範囲を調査した<sup>[1]</sup>。その過程で、瀬戸内海で生産量が多いカキ (養殖マガキ) に注目することを思いついた。カキは広島県で全国のおよそ6割を生産しており、岡山県と兵庫県を合わせると7割を超える。一方、国内では宮城県や北海道といった有名産地のほか、小規模な産地を含めると28県で生産されている (いずれも平成28年度農水省海面漁業生産統計調査)。各地のカキの生産量の統計はあるが、流通範囲のデータはなさそうである。瀬戸内海産に限らず調べてみると面白いのでは、と思って始めたのが表題の調査である。この調査では友の会会員だ

## <引用文献>

Sawai E., Y. Hibino and T. Iwasaki (2019) A rare river stranding record of sharptail sunfish *Masturus lanceolatus* in Fukuoka Prefecture, Japan. *Biogeography*, 21 : 27-30.

佐久間大輔 (2018) 自然史博物館をとりまく重層的ネットワーク-博物館のネットワーク. 本間浩一編. 博物館情報学シリーズ3 ミュージアムのソーシャル・ネットワーキング. p.83-138. 樹村房, 東京.

けでなく、筆者の個人アカウント (@soishida) を用いてTwitterでも呼びかけた。「生かき」(むき身・殻つきどちらでも可) を対象とし、店名、産地県名、日付に加え、Twitterでは「#カキ調査」というハッシュタグをつけてツイートしてもらうようにした。調査結果を分布図にして表示するサイト<sup>[2]</sup>を立ち上げ、調査期間中は数日に1回程度更新し、報告されたデータを随時閲覧できるようにした。更新時はその旨を筆者がツイートした。

その結果、2016年9月から2017年3月末で323名から合計4,429件のデータが集まった (調査は2月末までと告知し、一部3月末まで受け付けた。データ1件とは1店舗・1産地であり、店舗数では2,576店。協力者数は1人で複数アカウントを用いる等による重複の可能性はある)。広島県産は全都道府県で売られていること、瀬戸内海産は総じて西日本でシェアが高く、宮城以北では販売店舗が減ること、宮城県産は神戸より西ではほとんど見られなくなること、などがわかった<sup>[1]</sup> (図1)。



図1 カキ調査で得られた広島県産と宮城県産の養殖マガキの販売地点 ([1]より)

### Twitterを用いる利点

この調査を通して、筆者は市民科学におけるTwitterの利点をいくつか感じた。それらを以下に挙げてみる。

(1) **潜在的に強い拡散力がある**：拡散力はTwitterの持つ最も大きな利点であり、広い範囲から多くのデータが集まる。カキ調査では網走市から石垣市まで、さらに離島から報告があった。また、潜在的にそのテーマに興味を持つ人を取り込む上でもTwitterは有用であると考えられる<sup>[3]</sup>。

(2) 特別なプラットフォームを準備しなくてよい：サービスは無料であり、技術的な知識がなくても始められる。また、多くのユーザがすでに存在し、幅広い端末で利用できる。

(3) 調査に関わる人が相互にコミュニケーションできる：カキ調査では、Twitter上でプロットが不足している地域での調査をお互いに促したり、レア産地（生産量が少ない県）の出現を知って盛り上がる、といったコミュニケーションが生まれた（図2）。このような「祭り」感は、かつての市民科学では顔見知りの範囲でしか顕在しなかったものである。カキ調査では、明らかに多くの参加者が「全国を塗りつぶす」という目標を共有していたのである（図3）。



図2 カキ調査でのツイートのやり取りの例 (https://twitter.com/sawagani550cc/status/821294596466429952のツイート及びそれに対するリプライ。投稿者の許可を得て転載)

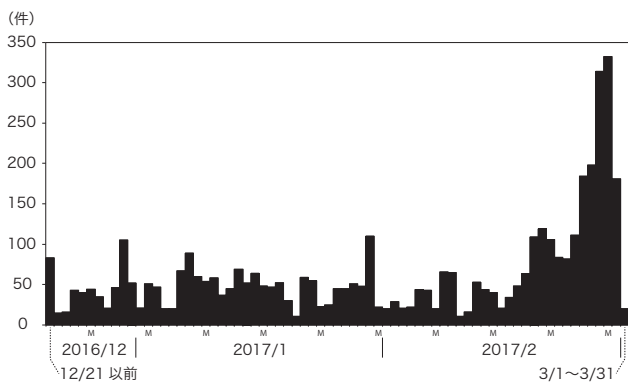


図3 カキ調査における調査日ごとのデータ件数。横軸のMは月曜日。調査終了の2月末が近づくに従って報告件数が増加しており、参加者の追い込みが伺える

(4) 写真を送りやすい：Twitterはコメント付きで手軽に写真を投稿できる。カキ調査では写真は不要としていたが、例えば首都圏での降雪現象を把握するため雪結晶の画像を募集する「#関東雪結晶 プロジェクト」<sup>[4]</sup> や、スガイという巻き貝の写真を集めて殻表に着生する緑藻のカイゴロモの被度と環境との関係を探ろうとする「スガイ&カイゴロモ全国調査」<sup>[5]</sup> など、写真投稿を駆使する市民科学はすでにいくつかの例がある（関東雪結晶プロジェクトは2019年2月より、Twitterでの情報収集をやめて専用アプリの使用に移行している）。

#### Twitterを用いる課題

一方で、Twitterを用いる課題も見えてきた。主なものをまとめてみる。

(1) アカウントを持たない人への対応：市民科学を普及教育活動の一環として位置づけるのであれば、参加の門戸は広いほうがよく、Twitterを使えない人、使いたくない人も参加できる環境を整える必要がある。カキ調査ではTwitterだけでなく、メールや郵送、ファクスによる情報提供も受け付けた。媒体別の報告データ件数のうち、64%が公開ツイートで、27%がメールによる報告であった（図4）。メールの窓口は依然必要と思われる。後述するように、Twitterユーザであっても公開で情報のやり取りをしたくない人もいると考えられる。ただし、窓口が増えるとそれだけ主宰者の作業は煩雑になる。

(2) 参加者のプライバシー保護：市民科学一般に言えることだが、観察データは観察者がその時刻にその場所にいたことを示しており、これはプライバシーに関わる情報でもある。観察データを誰がとったのかは市民科学において重要なメタデータであると筆者は考えているが、報告者名の取り扱いは配慮が必要である。カキ調査ではデータごとに報告者名を調査サイトに掲載することにしたが、ツイートでの報告はアカウント名を公開報告者名とし、それ以外の場合は個別に報告者名の公開の可否を尋ねる、という対応をとった。323名の協力者のうち、ツイート報告は182名（56%）、本名での公開を可とした人は57名（18%）、なんらかの匿名を希望した人は84名（26%）であった（図5）。少なくとも4人に1人は名前での公開を望まないが、一方でツイートでの参加や記名がモチベーションになるケースはあるのだろう。手間はかかるが、氏名やアカウント公開の可否の選択肢を設ける運用が望ましいと思われる。報告者の位置情報の特定を避ける工夫として、例えばカッコウとホトトギスが鳴いた位置をTwitterで募集する「#カッコウどこ カッコウとホトトギスの分布調査ONツイッター」<sup>[6]</sup> では、鳴き声が聞こえた場所の半径2kmにある公共の場所をつぶやく、という方法がとられていた。

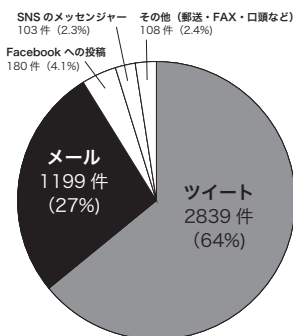


図4 報告媒体別のデータ件数。SNSのメッセージはTwitterとFacebookの合計。百分率の合計が100にならないのは四捨五入のため

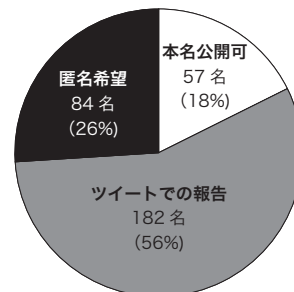


図5 ツイートで報告した人、及びそれ以外の人での本名の公開の可否の割合。匿名希望にはハンドルネームやイニシャルを含む

(3) 観察データのやり取り：例えば希少な生物を調査対象とする場合、その分布情報の公開は慎重でなければならない。Twitterを介して情報を集める場合、データは

必然的にネット上に晒される。ゆえに、その種や周辺環境の保全に影響しないかを見極める必要がある。例えばカマキリ類の分布を市民科学で調べる「カマキリ分布調査」<sup>[7]</sup>では、ツイートでの報告は市名(〇〇県××市)にとどめ、その後ダイレクトメッセージで詳細な地点情報を主宰者が聞き取る、という手順を取っていた。カキ調査の場合、店舗の位置情報のマスクは考慮しなかったが、店舗名は調査サイトに掲載せずすべて経緯度に置き換えた。これはスーパーの運営会社ごとに取り扱い産地の傾向がある場合、それを第三者がデータとして取得することを防ぐためであった。

(4) **Twitterに常駐する必要**：主宰者はデータ報告の投稿をチェックしたり、参加者とのコミュニケーションをとる必要がある。データの集約状況をフィードバックする間隔も短い方がよい。つまり、Twitterに日々ログインする時間が必要になる。Twitterユーザであれば苦にならない(?)かもしれないが、調査のためにTwitterを始める場合は、その点留意が必要である。もっとも、類似の課題はメーリングリストを介した調査でもすでに指摘されている<sup>[8]</sup>。

ウェブを利用する市民科学では、スマホの普及を背景にデータ報告用の専用アプリを開発して参加者にインストールしてもらう方法も増えている<sup>[9][10]</sup>。また、市民科学的な生物分布調査に特化したSNSプラットフォームも開発されている<sup>[11]</sup>。これらは情報のコントロール性に優れるが、Twitterに比べると参加のハードルは高いかもしれない。調査テーマや運営体制に応じて手法が選択されることになるだろう。

博物館や科学館は、公的な機関として社会的な信頼性を持ちつつも、よい意味で市民に対する敷居の低さがある。Twitterによる市民科学を進めるうえで、博物館・科学館には大きなアドバンテージがある、というのが筆者の持つ印象である。個々のサービスの仕組みやユーザ数は今後変化するかもしれないが、SNSそのものは当分社会インフラであり続けるだろう。使い方の習得や作法

への慣れ、さまざまな配慮など、SNSが気苦労を強いるのは事実である。これからの私たちに必要なのは、活用事例の継続的な蓄積と、ノウハウの共有であろう。今後、さらなる事例が各地から出てくることを期待したい。

#### <文 献>

- [1] 和田岳・石田惣. 2017. スーパーマーケットで楽しむ. In: 大阪市立自然史博物館(編) 第48回特別展「瀬戸内海の自然を楽しむ: 解説書『瀬戸内海の自然を楽しむ』. pp.96-98. 大阪市立自然史博物館, 大阪.
- [2] スーパーの「かき」の産地しらべ(石田惣) <https://sites.google.com/site/oystermap/>
- [3] 大澤剛士・和田岳. 2016. 市民参加による広域を対象とした生物調査の可能性 — 近畿2府4県における駅のツバメ営巣調査結果およびデータ公開 —. Bird Research, 12: R1-R8.
- [4] 雪結晶画像や天気などの気象状況の情報提供のお願い: #関東雪結晶 プロジェクト(荒木健太郎) <http://www.mri-jma.go.jp/Dep/fo/fo3/araki/snowcrystals.html>
- [5] スガイ&カイゴロモ全国調査(香川理・内田翔太・千葉聡・大澤祐美子) <http://sugai-to-kaigoromo.mystrikingly.com>
- [6] #カッコウどこ カッコウとホトトギスの分布調査ONツイッター(三上桂) <https://sites.google.com/view/cuculusurveyjapan-ontwitter/home>
- [7] カマキリ分布調査(山崎和久・中峰空) <https://mantodeajp.wixsite.com/distro-res>
- [8] 和田岳. 2005. 博物館における市民を巻き込んだ調査研究 — 大阪市立自然史博物館の事例 —. 日本生態学会誌, 55: 466-473.
- [9] 岐阜県外来生物リポーターの募集について(岐阜県) [https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kanky/shizenhogo/c11265/gairai\\_report\\_site.html](https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kanky/shizenhogo/c11265/gairai_report_site.html)
- [10] N. A. G. Kerstes, T. Breeschoten, V. J. Kalkman & M. Schilthuisen. 2019. Snail shell colour evolution in urban heat islands detected via citizen science. Communications Biology, 2: 264.
- [11] iNaturalist (California Academy of Sciences, the National Geographic Society) <https://www.inaturalist.org> (ウェブサイトの確認日はすべて2019年8月23日)

## 試行錯誤からよい事例の積み重ね

海遊館 広報チーム  
村上 寛之

### 1. はじめに

海遊館(大阪市港区)は1990年に開業し、みなさまよりご支援を賜りまして、2020年に30周年を迎えます。この間、パソコンも携帯電話もなかった時代から、スマートフォンの時代へと変わり、情報が速く広く伝わることを実感します。本稿では、日々悩み、試行錯誤しながら取り組んでいる海遊館のSNSが、少しでも皆様の参考になれば幸いです。

海遊館は開館当初より、テーマを「Ring of Fire(環太平洋火山帯)/Ring of Life(環太平洋生命体)」と定め、太平洋をとり囲む自然環境とそこに暮らす生き物たちを紹介しています。火山の活動により、長い年月をかけて地球規模でつくられる特徴的な地形や海流、そして気候などの自然環境(大地は動くの要素)と、その環境に進化適応していく生き物たち(生命のつながりの要素)を根底に持っており、「生き物だけでなく、地球っておも

しろいな」と日々感じているのですが、SNSをはじめ、私が所属する広報チームが発信する情報は、「自然や生き物への興味の入口」を意識したものとなっています。

## 2. 発想を変える

私は入社から約20年間、飼育員として「日本の森」というコーナーの植栽管理からペンギン、クラゲ、ジンベエザメなど、さまざまな生き物の飼育展示を経験しました。その後、広報チームに異動となり「海遊館が持つおもしろさを伝えなければ…」と責任を感じていました。海遊館の広報チームは、飼育展示を経験したスタッフと総合戦による混成チームです。広報宣伝やデジタルマーケティングなどの専門家はおらず、全員が一から広報業務を覚えます。また、全員が海や生き物に深い興味を持っているというわけでもなく、多様な個性が集まった混成チームゆえに、日頃の意見交換が重要になります。そんな中、私にとって驚きの出来事がいくつかありました。例えば、「エイにはいろんな種類がいるかもしれないけど、結局は全部エイですよ…」とか「あのピンク色の魚は綺麗だけど、いま流行のピンクとはちょっと違いますね…」等々。私は自分がおもしろいと思っている事を多くの人に伝えなければと考えていましたが、興味を持てるポイントは人それぞれ異なることに気づきました。海遊館らしい情報って何だろう、そして、できるだけ多くの方に関心を持っていただくには、どんな表現が適しているのだろうと考えるようになりました。

## 3. 慎重にスタート

最初にスタートしたSNSはTwitterです。当時は、「炎上」という言葉がよく使われていましたので、私たちが「奇抜な投稿で話題化（拡散）にチャレンジするよりも、決して炎上しないこと」を最優先しました。それでも、ペンギンやアザラシのリラックスした様子やかわいらしい写真には「いいね！」が付きやすく、生き物たちのお誕生日に、飼育員が氷と魚でつくった特製ケーキを作ってプレゼントする内容にはコメントを沢山いただきます。少しずつフォローしてくださる方の数が増え、コメントからも海遊館の情報を受け取ってくださる方の雰囲気がわかるようになってきました。

次に開設したFacebookでは、少しでも深く海遊館や飼育員の想いが伝わるように原稿を考えるようになりました。以前から継続している海遊館日記（飼育員が毎日書いているブログ）の内容を元に、Facebookに投稿することも増えてきました。また、不定期ですが、何かプレゼントできる時は、コメント&プレゼント応募の企画を設けることで、より沢山の感想を知ることができ、双方向のコミュニケーションを意識できるようになりました。そして、海遊館がSNSを活用する目的は、生き物の詳しい情報発信ではなく、広く一般の方を対象にしたファンづくり、そしてファンとのコミュニケーションを深めることであることが明確になってきました。

最後に開設したInstagramでは、海遊館のテーマと生態展示と呼んでいる展示手法を意識して、自然環境と生き物の暮らしのつながりを表現しようと決め、日々変化する生き物たちの様子に加え、天窓から差し込む太陽の光など、奇跡のようなシーンを収めようと撮影に四苦八苦している状況です。

## 4. 飼育員の想い

基本的なソーシャルメディア・ポリシーは設けていますが、厳密なルールや詳細な投稿計画はなく、生き物に対する敬意や愛情の感じられない投稿はNGとか、生き物を擬人化した投稿もNGくらいに留め、迷ったら広報チーム全員で話し合うスタイルでSNSの運営を続けています。各SNSの投稿は週に2〜3回のペースで、積極的に活用されている企業と比較すると少ない方だと思います。SNSの投稿とお客様やメディアの方とお話することは同じと考えていて、それほど身構えたり、逆に、普段言わないようなカッコイイ文章を作り込んだりする必要はないと思っています。生き物の普段の姿、飼育員の想い、投稿を読んでくださるファンの方の気持ちに沿った内容を続けて行くことが大切と考えています。そんな中、偶然の流れでしたが、2018年に計画的なTwitter投稿を行った事例を紹介します。

ある日、コツメカワウソの担当者が「リアルなコツメカワウソ」として販売されている商品に細かい注文（文句）をつけたいと言うのです。幸いにも海遊館から遠くない企業さんでしたので、その言い分を聞いてもらえることになりました。カワウソ担当者は、頭部や尾を平たくして、肘には感覚毛を付けて、肉球のつくりはこうだなど、写真で示しながら細かく熱心に説明したのです。毎日、健康管理のために詳しく観察している飼育員ならではのマニアックな指摘だなあと考えていたところ、相手の企業さんも「ぜひサンプルを作りましょう！」と乗り気になってくれました。そして、せっかくなので「海遊館から細部の指摘をすること」をきっかけに、ちょうど「世界カワウソの日」が近く、日本のコツメカワウソ密輸のニュースが絶えなかったことから「カワウソは、ペットとして飼えませんが、リアルなぬいぐるみをかわいがってください」という締めをゴールに、計画的なTwitter投稿を行うことにしました。単に密輸の問題を提示するだけでは、多くの人に情報を伝えることができなかったと思っています。

## 5. 継続すること

SNSの投稿を続けることは、考え方によって、大きなプレッシャーになる場合があります。大手企業では、しっかり予算を付け、専任のSNS担当者を設けて、カメラマンとコピーライターを外注し、目標数字を追いかけるのが当たり前かもしれません。また、外部の代理店にSNSの運営を代行してもらう方法もあります。しかしながら、動物園や水族館、博物館には、日常にさまざまな

出来事があるのが強みだと思います。館内外の情報収集に工夫して、博物館同士の連携の機会をうまく活用すれば、今まで以上に楽しくSNSを続けられるのではない

かと感じています（ぜひ、よろしくお願いします）。これからも、SNSを含め常に変化する世の中の情報に耳を傾けながら、試行錯誤を続けていきたいと思っています。

## SNSフレンドリーなミュージアム環境の構築に向けて

アカデミック・リソース・ガイド株式会社 (ARG)  
代表取締役  
プロデューサー  
岡本 真

### 1. もう一つのSNS活用

そもそもなぜSNSを活用するのだろうか？最初にこの点を少し考えておきたい。SNS活用に取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうと思っている場合、この「なぜ」はきちんと考えておきたい問題だ。「みんながやっているから」という回答はあってはいけなし、さすがにないと思うが、そもそもなぜSNSを活用しなければいけないのだろうか？ウェブサイトでは事足りないのだろうか？

多くの場合、サイトやメールではリーチしないところにリーチすることや、SNSの波及効果の高さを考慮し、さらなる認知度向上や来館者増加を期待してというのがSNS活用の理由や目的だろう。ただ、この活用がミュージアム自体のSNSアカウントを開設することに傾斜しがちではないだろうか。確かにSNSはその波及力の高さ、特に爆発的に注目される、いわゆる「バズる」効果・影響は大きく、「バズる」ことに期待する心理も現場にはあるだろう。

ただし、もう一つのSNS活用も常に考えておきたい。それはミュージアムの公式アカウント運用に精を出すこととは異なる。そうではなく、来館者らによってSNSで話題にされやすいミュージアムを創り出すということだ。実際、SNS運用の専任担当者を置ける科学博物館が日本にあるだろうか。限られた人的体制のなかで無理に自館のSNS運用に労力を割くのではなく、ミュージアムの根幹の一つである展示そのものを、来館者がSNSで発信したくなるように整備することを考えてみてはどうだろうか。

### 2. SNSで発信しやすくなる3ポイント

#### 写真撮影方針：

では、SNSで発信しやすいミュージアム環境を考えてみよう。まず挙げられるのは、館内での写真撮影の制約をなくすことである。ミュージアム全般のなかでは科学博物館は比較的、写真撮影を許容する文化であると思うが、それでもときおり厳しい制約を掲げている施設を見なくもない。わざわざ施設を訪れる来館者からすれば、その場での見聞や気づき、引いては感動を、写真を添えてSNSに投稿したくなるだろう。それは至極当然なことだ。

SNS活用を考えるなら、まずこの写真撮影方針をいま一度ぜひ見返してほしい。この点では国立科学博物館のポリシーは参考になるだろう。

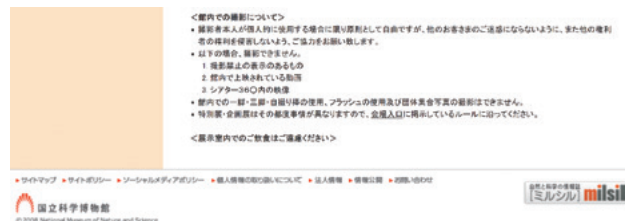


図1 国立科学博物館の館内撮影ポリシー

#### 体験型の展示：

自然・科学に関する展示は美術品や文化財の展示に比べると、一点一点レベルでは展示品をぜひ写真に収めたといはなりにくくないだろうか。もちろん、内容次第であり一概には言えることではない。「あえて言えば」の話である。

他方、科学博物館の強みはなんといっても体験型の展示であろう。「経験・思考型の展示」への移行という流れもあるが、依然として体験型の展示は広くみられる。また、ハンズオン展示、インタラクティブ展示は地方の小さな博物館でもかなり定着してきたと感じている。実際にYahoo!リアルタイム検索等で調べてみると、体験型やハンズオンの展示を楽しんでいるわが子の写真をSNSに投稿している保護者は実に多い。いわゆるSNS映えまでも視野に入れた体験型の展示を増やしていくことも欠かせない。

#### オープンデータ：

このニーズは大衆的・一般的ではないが、科学博物館の根強いファン層向けには重要である。所蔵資料を管理するデータベースをウェブ公開している施設も少なくない。そのデータを誰もが許諾なく営利目的も含めて自由に二次利用できるオープンデータにすることもぜひ考えてほしい。実際、科学博物館の場合、著作権がらみの問題はそこまで多くは生じないはずだ。

たとえば、こういうケースを考えてみたい。ある科学博物館の展示を見て、その感想をSNSで少しまとまった記事として発信したい場合である。展示室で撮影した少し反射してしまった写真や人影が写りこんでしまっている写真より、せっかくなら博物館が自らオープンデータとして公開している展示品のデータが画像込みで存在していれば、うれしいのではないだろうか。このように思ってくれる科学ファンは科学博物館にとって重要な存在のはずだ。





図2 名古屋市科学館のオープンデータとクリエイティブ・コモンズに関する説明ページ

そして少し大上段な議論をすれば、科学博物館のミッションの一つが科学的知識の普及であるならば、本来的にはサイエンスコミュニケーションの一環としてオープンデータの方針が広く採用されていて当然にも思える。

実際、名古屋市科学館では、天文情報について部分的にオープンデータを実現している。オープンデータは即効性のある取り組みではないが、中長期的にみたときに科学博物館を支える層に確実に届いていく。

### 3. 評判の把握

「エゴサーチ」と呼ばれる行為がある。SNSで自分がどのように話題になっているかを調べることだ。有名人・著名人がやることのように思われているかもしれないが、SNSでの発信に熱心な方の場合、ごく普通の個人でも行っている行為だ。

SNS活用に取り組むのであれば、SNSで自館がどのように話題になっているかも把握したほうがよいだろう。ごく簡単な方法としては自



図3 Yahoo!リアルタイム検索での「科博」の検索結果の分析グラフ箇所

館名でSNSをエゴサーチすればよい。Yahoo! JAPANが提供するリアルタイム検索<<https://search.yahoo.co.jp/realtime>>の場合、SNSでの言及数の推移や投稿文面から読み取れる正負の感情比率まで表示してくれる。

また、もし予算が確保できるのであれば、SNSデータの解析企業が行っているSNSデータ分析を行ってみるのもよいだろう。価格はおおむね月額10万円からという相場観である。サービス提供企業の多くが1、2週間の無料トライアルを実施しているので一度試してみることを勧めたい。

### 4. 最後に - SNSで溺れないために

以上、SNSフレンドリーな科学博物館をつくるための最低限の3方策をまとめてみた。実際にはこれよりさらに踏み込んだ取り組みが必要なことも多いだろう。特に2点目の「体験型の展示」は、踏み込んでいえば「体験型的设计 (デザイン)」を周到に組み上げる必要がある。徹底的に取り組むのであれば、デザイン分野で普及してきている「カスタマージャーニーマップ」や「ユーザーエクスペリエンスマップ」の作成くらいは必要だろう。ここではふれきれないが、興味があればぜひ調べてほしい。

さて最後にくれぐれもSNS活用に溺れないようお願いしておきたい。特に本稿では直接的には論じていない自館のSNS活用にあっては、「バズる」ことを意識しすぎないようにしてほしい。文化施設がSNS活用に熱心なのはもちろん悪いことではない。しかし、話題になることを意識するあまり、これが文化施設や社会教育機関がやることかという非常に残念な事例もないわけではない。『ソーシャルメディア論』(青弓社、2015年)の編著者である畏友の藤代裕之さん(法政大学)がよく「ソーシャルメディア(≒SNS)は人を狂わせる」と言う。非常に同感である。そして、狂うのは人だけではない。科学博物館の理念を壊すことにならないように、施設自体がSNSで溺れないように心掛けてほしい。

**Panasonic**

Core Products  
 Security  
 Communication  
 Office  
 Infrastructure  
 Terminal System  
 A/C Network

Total Solution  
 マーケティング・サービス  
 システムインテグレーション  
 設置・施工  
 99%メンテナンスサービス  
 クラウド・運用サービス

パナソニックシステムソリューションズ ジャパン株式会社  
[www.panasonic.com/jp/company/psj.html](http://www.panasonic.com/jp/company/psj.html)

包み込まれるような映像体験。

**Media Globe Σ**

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、「8K」の投射解像度を持つ最新プロジェクトを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>



## ■ 自然災害の被害

バハマ国立博物館が、ハリケーンで甚大な被害を受ける

2018年1月13日に、バハマ国（総人口：40万人）の首都ナッソーにあるバハマ国立博物館のアバコ島分館に、同館にとって初めての自然史部門の常設展示がオープンされたが、2019年9月1日にバハマ諸島を襲った史上最強クラスのハリケーン「ドリアン」により、アバコ島分館は同島（人口：1.7万人）の他の多くの建物とともに破壊された。

破壊される前の新しい展示では、約700の島々と2,400の岩礁から構成されているバハマ諸島の地質、動植物の多様性、古生物の化石が紹介されていた。展示の企画制作に参加していたフロリダ州立自然史博物館は、早くも復興支援を申し出た。

National Museum of The Bahamas, Nassau.  
<https://www.bbc.com/news/in-pictures-49576850>  
<https://thenassauguardian.com/2018/01/16/national-museum-of-the-bahamas-ammc-opens-its-first-natural-history-exhibit-on-abaco/>  
<http://www.ammcbahamas.com/>  
<https://ammcabacobahamas.weebly.com/who-we-are.html>  
<https://www.floridamuseum.ufl.edu/nhdept/statement-of-support-abaco-grand-bahama/>

## ■ リニューアル

米ジョンズタウン洪水博物館が、リニューアル

ペンシルバニア州ジョンズタウン（人口：2万人）にあるジョンズタウン洪水博物館で、建て替えの計画が進められている。同館は、1889年5月と1936年に同市を襲った大規模洪水の記憶を後世に継承するために、1973年に設けられた施設である。現在、市立図書館の一角にあるが、建物の老朽化と施設が手狭になったことで、市内の別の場所に新しく独立した施設として整備が進められている。開館時期はまだ公表されていないが、新しい施設の常設展示では最新の展示技術を駆使して、ジョンズタウンを襲った洪水を紹介することになっている。1889年5月31日にジョンズタウンを流れる川の約22キロ上流にあったダムが大雨で決壊したことにより、押し寄せた濁流によって新興の製鉄の町だった同市全域が破壊され、甚大な被害を与えた。

Johnstown Flood Museum, Johnstown, PA.  
<https://www.jaha.org/attractions/johnstown-flood-museum/the-campaign-for-the-johnstown-flood-museum/renovation-details/>

<https://www.jaha.org/attractions/johnstown-flood-museum/>

<https://www.jaha.org/attractions/johnstown-flood-museum/flood-history/facts-about-the-1889-flood/>

## ■ 企画展・特別展

気候変動展が、米フロリダ州立自然史博物館で開催

2019年5月7日に、フロリダ州ゲインズヴィル（人口：13万人）にあるフロリダ州立自然史博物館で、気候変動展が開幕した。同展では、地球の温暖化が重要な文化遺産にどのような影響を与えているかをテーマにしている。気温の上昇や海面上昇の影響が、世界各地の文化遺産に与えている具体的な例が紹介されている。会期は、2019年11月17日まで。

Our Changing Climate: Culture at Risk.  
Florida Museum of Natural History, Gainesville, FL.  
<https://www.floridamuseum.ufl.edu/exhibits/culture-at-risk/>  
<https://www.floridamuseum.ufl.edu/pressroom/2019/05/07/climate-change-on-cultural-sites/>  
[https://www.alligator.org/the\\_avenue/climate-change-is-a-hot-topic-for-new-museum-exhibit/article\\_0875ef86-78fd-11e9-b602-3f11d74ff583.html](https://www.alligator.org/the_avenue/climate-change-is-a-hot-topic-for-new-museum-exhibit/article_0875ef86-78fd-11e9-b602-3f11d74ff583.html)

「メルトダウン：融ける氷河」展が、ウィーン自然史博物館で開催

2019年6月5日から9月8日まで、オーストリアの首都ウィーン（人口：190万人）にあるウィーン自然史博物館で、「メルトダウン：融ける氷河」展が開催された。同展では、地球の温暖化現象により、急速に溶け、消滅の危機に瀕している世界各地の氷河をテーマにしている。同展は「氷河の重要性」「氷河融解の緊急課題」「氷河融解の帰結」の三部構成になっており、スイスやニュージーランドなどで見られる氷河の融解現象が事例として紹介されている。企画制作は、地球温暖化問題に取り組んでいるNGO団体の「Project Pressure」。巡回展でもある同展は、ウィーン自然史博物館での開催後、ロンドンのホーニマン博物館で2019年11月23日から開催される予定だ（展覧会名：MELTDOWN）。

Dahinschmelzen. Gletscher als Zeugen des Klimawandels.  
Naturhistorisches Museum, Wien.  
<https://www.nhm-wien.ac.at/meltdown>  
<http://www.visitingvienna.com/sights/museums/glacier-exhibition/>

### 写真展「海面上昇の危機」が、フィジー博物館で開催(2011)

地球の温暖化による影響で海面上昇を目の当たりにしているフィジー共和国（総人口：89万人）の首都スバにあるフィジー国立博物館で、地球の温暖化が原因で海面上昇の危機にさらされている世界各地の様子を写した写真展が、2011年に開催された。同展を企画制作したのは、国際的なNGO団体の「Many Strong Voices」。巡回展でもある同展は、2009年にコペンハーゲンで開催された第15回気候変動枠組条約締約国会議（COP15）の会場で立ち上がり、そのあと2010年のバンクーバー冬季五輪や、ノルウェーのオスロ国立民俗学博物館、シカゴのフィールド自然史博物館、南アフリカのダーバン自然科学博物館やポーランドのワルシャワ国立民族学博物館、カナダのオンタリオ科学館等、世界各地の博物館で開催されてきた。巡回終了時期は未定。

Portraits of Resilience.

Fiji Museum, Suva.

<http://www.manystrongvoices.org/portraits/>

<http://www.manystrongvoices.org/news.aspx?id=5062>

<https://www.rnz.co.nz/international/pacific-news/199352/fiji-museum-displays-children%27s-climate-change-photos>

### 海洋のプラスチック汚染展が、リョスカ工芸美術館で開催

2019年6月15日に、スウェーデン第2の都市イエテボリ（人口：58万人）にあるリョスカ工芸美術館で、海洋のプラスチック汚染問題を紹介した展覧会「海洋のプラスチック」が始まった。同展では、海洋のプラスチック汚染に危機感をもった若手のデザイナーによってデザインされたプラスチックの造作物によって、プラスチック汚染の現状が紹介され、またプラスチック製品のリサイクルの展望を描いている。同展で参加したデザイナーの多くは、スウェーデンでプラスチック問題に取り組んでいる企業で働くデザイナーや、個人として働いているデザイナーなど。会期は、2020年1月5日まで。

Ocean Plastics.

Röhsska museet, Göteborg.

<https://rohsska.se/en/exhibitions/ocean-plastics/>

<http://www.thesignspeaking.com/12191-2/>

### エボラウイルス病展が、米デービッド・J・センサー医学博物館で開催

2017年6月19日から2018年6月15日まで、米国ジョージア州アトランタ（人口：450万人）にあるデービッド・J・センサー医学博物館で、エボラウイルス病の流行をテーマにした展覧会が開催された。同展では、2014年から2016年にかけて、西アフリカをはじめアメリカや他の国々で確認されたエボラウイルス病の流行と国際社会の取り組みが紹介された。デービッド・J・センサー医学博物館（1996年設立）は、ジョージア州アトランタに

ある連邦政府の疾病予防管理研究センターにある公開施設だ。

Ebola: People + Public Health + Political Will.

David J. Sencer CDC Museum, Atlanta, GA.

<https://www.cdc.gov/museum/exhibits/ebola.htm>

### カリフォルニアの山火事展が、ロザンゼルス自然史博物館で開催

2019年2月25日から8月5日まで、カリフォルニア州ロザンゼルス（人口：400万人）にあるロザンゼルス自然史博物館（ロサンゼルス郡立自然史博物館機構のひとつ）で、カリフォルニア州の山火事をテーマにした展覧会が開催された。同展では、山火事が起こる原因、予防、動植物への影響、山火事が起きる前と起きた後の地形の変化が豊富な事例で紹介された。

Wildfire.

Natural History Museum of Los Angeles, Los Angeles, CA.

<https://nhm.org/experience-nhm/exhibitions-natural-history-museum/wildfire>

### 石油タンカー・ヴァルディーズ原油流出事故30周年記念展が、アラスカで開催

エクソン・ヴァルディーズ号原油流出事故は、エクソン社が保有した原油タンカー「エクソン・ヴァルディーズ」が1989年3月24日に、アラスカ州のプリンスウィリアム湾での座礁により積荷の原油を流出させた事故。この事故はこれまで海上で発生した人為的環境破壊のうち最大級のものとなされている。同事故の30周年を記念して、事故発生地のヴァルディーズに近いアラスカ州コルドバ（人口：2,000人）にあるコルドバ歴史博物館で、エクソン・ヴァルディーズ号原油流出事故の全容を伝える展覧会が開催されている。同展は、原油流失の被害状況や油まみれになった動物、油の除去や海鳥に付着した油の洗浄に追われる人々の姿を写した写真や動画などで構成されている。また事故後、解体されたエクソン・ヴァルディーズの船体の一部も展示で紹介されている。会期は、2019年3月24日～12月31日。同展は、コルドバ歴史博物館での開催後、事故発生地のヴァルディーズやアンカレッジ、ジュノーなどアラスカ各地を巡回する予定だ。

Exxon Valdez Oil Spill.

Cordova Historical Museum, Cordova, AK.

<https://www.thecordovatimes.com/2019/03/29/oil-spill-exhibit-will-remain-on-display-in-museum-for-remainder-of-year/>

<http://www.evostc.state.ak.us/index.cfm?FA=main.anniversary30>

<https://www.youtube.com/watch?v=VaRdUHrUnBs>

<https://www.youtube.com/watch?v=NLdH33JmscM>

[https://www.youtube.com/watch?v=IJYVHsnc\\_A](https://www.youtube.com/watch?v=IJYVHsnc_A)

## 11月12月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	サイエンス屋台村	11月3日
	クリスマスツリー点灯式	11月30日
岩手県立博物館	第70回企画展「よらい・かぶと・かたなの世界」	9月21日～11月24日
仙台市天文台	宇宙の日作文絵画コンテスト作品展	10月12日～12月28日
	折紙照明展～星の造形～	12月21日～12月28日
福島県環境創造センター	国立科学博物館巡回展「琉球の植物」	12月17日～2020年1月13日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「人工衛星」	10月5日～12月30日
	スペースパーク企画展「昭和レトロ展」	12月7日～2020年1月7日
つくばエキスポセンター	世にも不思議な美術展～トリックアートの世界2～	11月2日～2020年2月9日
産業技術総合研究所 地質標本館	地質標本館 企画展「恐竜とアンモナイト -白亜紀の日本を語る化石-」	10月1日～11月4日
	地質標本館 特別展「日本初!日本列島大分析 元素で見る『地球化学図』」	10月8日～2020年1月5日
栃木県立博物館	第125回企画展「昭和ノスタルジー -なつかしい栃木の情景-」	10月12日～11月24日
	テーマ展「昭和天皇の生物学御研究」	11月26日～2020年1月19日
	テーマ展「おじいさんやおばあさんの子どものころの暮らし」	12月14日～2020年4月5日
那須塩原市那須野が原博物館	企画展「南庄作 いのちを彫る」	10月12日～2020年1月19日
群馬県立自然史博物館	第61回企画展「海の森～海藻たちのワンダーランド～」	10月5日～12月1日
川口市立科学館	科学捜査展	12月14日～2020年2月16日
入間市博物館	アリットフェスタ2019 特別展「史料で読み解く狭山茶の歴史」	10月31日～12月8日
千葉県立中央博物館	カミツキガメ -どのような生きものか? いるとなぜいけないのか?-	10月26日～2020年1月13日
	金属鉱物資源展	11月30日～2020年2月2日
千葉県立現代産業科学館	開館25周年記念企画展「潜水-水中の科学・技術・仕事-」	10月12日～12月1日
国立科学博物館	特別展「ミイラ ～『永遠の命』を求めて」	11月2日～2020年2月24日
	企画展「えほんが引き出す博物館の魅力(仮)」	12月17日～2020年3月1日
郵政博物館	秋期企画展「郵便屋さんの図像学」(Iconography of Postman)	10月12日～12月25日
多摩六都科学館	冬の特別イベント ROKUTO ROBOT PARK	12月21日～2020年1月4日
三菱みなとみらい技術館	企画展「スポーツを科学する～人間の能力はすごい!～」	11月1日～2020年1月13日
神奈川県立 生命の星・地球博物館	令和元年度特別展「アオバトのふしぎ～森のハト、海へ行く～」	7月20日～11月10日
新江ノ島水族館	デンキウナギのecoツリー点灯	11月1日～12月25日
	ヒカリノエノスイ ～美しい水族館～ えのすいワンダーアクアリウム2019 Final -クリオネと冬の妖精たち-	11月1日～12月25日
	テーマ水槽「クリスマス」	11月1日～12月25日
平塚市博物館	冬期特別展「賢治がみつめた石と星」	11月2日～2020年1月13日

開催館	展覧会名	開催期間
糸魚川市フォッサマグナミュージアム	特別展「日本列島の歴史を変えた石展」	10月5日～12月1日
岐阜県博物館	特別展「岐阜は日本のど真ん中 -岐阜県植物誌は語る-」	9月20日～11月17日
世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ	アマゾンを超える水の楽園 ブラジル・パンタナール大湿原 ～第1章 澄みわたる泉～	7月13日～12月8日
	アマゾンを超える水の楽園 ブラジル・パンタナール大湿原 ～第2章 残された森～	12月14日～2020年4月12日
中津川市鉱物博物館	第24回企画展「南極の石-太古の地球をのぞく」	10月5日～12月22日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	トピックス展「ダンゴムシとワラジムシ」	10月16日～12月8日
	企画展「大絶滅-地球環境の変遷と生物の栄枯盛衰-」	11月30日～2020年4月5日
鳳来寺山自然科学博物館	奥三河の滝展	11月2日～2020年3月30日
トヨタ産業技術記念館	企画展「トヨタグループはじまり物語 ～世の人のために、これからも～」	9月25日～12月1日
名古屋市科学館	チームラボ★学ぶ!未来の遊園地と、花と共に生きる動物達	11月30日～2020年2月16日
博物館明治村	博物館明治村×るろうに剣心-明治村剣客浪漫譚-	8月1日～12月15日
真珠博物館	企画展「御木本幸吉交遊録～真珠王はこんなネットワークを持っていた～」	3月16日～2020年2月29日
滋賀県立琵琶湖博物館	水族企画展示 「ピワマスと仲間たち」	7月20日～11月24日
	企画展示 海を忘れたサケ -ピワマスの謎に迫る-	7月20日～11月24日
	A展示室クロージング展示 地域の人々による展示コーナー 「鉱物・化石のよもやま話」	9月15日～11月24日
キッズプラザ大阪	企画展「わたが つむぐ 世界」	11月27日～12月3日
きしわだ自然資料館	特別展「タコの王国」	11月16日～2020年1月26日
伊丹市昆虫館	特別展「琉球列島-生物多様性の宝庫-	9月4日～12月23日
	プチ展示「日本の色・昆虫の色」	11月6日～2020年1月13日
	企画展「アルマス～ファール先生のひみつ基地～」	11月7日～2020年1月27日
兵庫県立人と自然の博物館	展示特別企画「ひょうごのレッドリスト展」 ～哺乳類・爬虫類・両生類・魚類～	10月12日～2020年1月5日
明石市立天文科学館	ユニバーサルデザイン展～やさしい天文展示～	10月19日～12月8日
	2020年全国カレンダー展	12月14日～2020年1月26日
鳥取県立博物館	殿様の愛した禅 黄檗文化とその名宝	10月5日～11月4日
	生誕120年 芸術写真の神様 塩谷定好とその時代	11月16日～12月15日
倉敷市立自然史博物館	第27回 しぜんしくらしき賞作品展	11月9日～12月18日
防府市青少年科学館	特別展「もぐもぐ探検隊!～“くち”から“おしり”まで～」	10月19日～12月1日
愛媛県総合科学博物館	巡回展「国際周期表年2019 特別展」	12月14日～2020年1月26日
北九州市立自然史・歴史博物館	秋の特別展「九州発!棟方志功の旅 彫り起こされた足跡と交流」	10月12日～12月1日
	冬の特別展「(仮)コレクション大集合～モノが語る私たちの暮らしと自然～」	12月21日～2020年2月11日
佐賀県立宇宙科学館	秋冬の企画展「元素展～万物の起源を探る」	10月26日～2020年1月13日
熊本博物館	国立科学博物館連携事業「生命のれきし-君につながるものがたり-」	12月3日～2020年1月26日
宮崎県総合博物館	特選! 蔵出し展 ～ミュージアムコレクション2019～	10月19日～12月8日

※次号(1月号)に掲載の1月2月の特別展情報は11月18日(月)までにお寄せください。

## リニューアル情報

※次号（1月号）に掲載のリニューアル情報は11月18日（月）までにお寄せください。

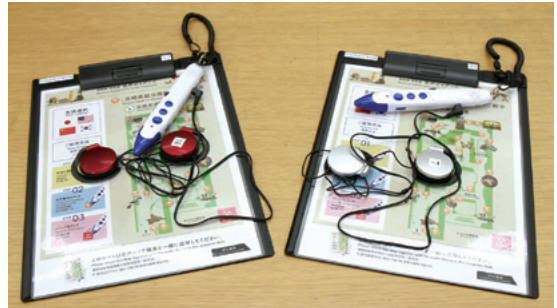
### 宮崎県総合博物館

[更新箇所] 常設展示室における多言語音声ガイドシステム「音えんぴつ」の導入

[更新内容] インバウンド誘客の取組の一つとして、館内の展示資料に関する外国語による音声ガイドシステムを導入しました。1階自然史展示室と2階歴史展示室内に全70箇所の説明ポイントを設置し、館内地図にペン型端末をあてると英語・中国語・韓国語・日本語の4カ国語から選択した言語の音声で説明を聞くことができます。公開に先立ち、県内在住の外国人大学生や国際交流員の方を招いた内覧会も開催しました。外国人観光客への音声ガイドシステムの利用料金は無料です。

[公開日] 2019年9月21日

[その他] 対応言語 英語 中国語 韓国語 日本語



### 神宮徴古館農業館

[更新箇所] 分館である「式年遷宮記念 せんぐう館」のリニューアル開館

[更新内容] 平成29年の10月に台風で被災し休館となっていました。本年改修工事が終わり、一部展示内容を更新しリニューアル開館の運びとなりました。当館は式年遷宮によって伝えられてきた精神と技術を展覧し、未来への継承を目指す博物館として平成24年に開館しました。館内では御装束神宝の調製工程や外宮正殿の原寸大模型など、伝統的な工芸技術や建築技術を知ることができます。今回の付帯工事で、社殿の造営に関する祭典や技術についてより視覚的に体感できる展示となりました。

[公開日] 2019年11月7日



**NOMURA**  
GROUP

## 世界に、歓びと感動を



株式会社 乃村工藝社

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

こころを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

## Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F  
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

## 飯田市美術博物館

[更新箇所] 自然展示室・文化展示室、ロビー展示の一部

[更新内容] 開館以来30年間更新されていなかった自然と文化の常設展示室、および展示室へ至るロビー空間の展示をリニューアルしました。

自然展示室では大型模型や恐竜の全身骨格を撤去し、南アルプスの高山帯や身近な里山の展示を新たに加え、伊那谷（長野県南部地域）の自然のガイダンス機能を強化しました。また、トピック展示スペースをつくり、年に数回のミニ企画展をおこなえるようにしました。展示室内でフリーWi-Fiを使えるようになり、手持ちの端末でQRコードを読んで、オリジナル映像や鳥やカエルの鳴き声を聞けるシステムも導入しました。

巨大模型等を撤去したスペースは部屋にして壁面を増やし、新たな展示ケースは可動式にし、学芸員が展示デザインを変更しやすい空間になりました。来館者が何度訪れても新しい発見があるような、そんな変化のある常設展示です。

[更新面積] 777平方メートル

[公開日] 2019年7月20日

[準備期間] 3年（2016年7月～2019年7月）



大型模型を撤去し、展示空間が増えた自然展示室

## 新江ノ島水族館

[更新箇所] カピバラ～陽だまりの草原～

[更新内容] 新たにプールを設置し、水辺の生き物カピバラの行動を間近でご覧いただけるようになりました。

[公開日] 2019年7月20日

[更新箇所] ウミガメの浜辺

[更新内容] 自然に近い環境で優雅に泳ぐようすと、アカウミガメの繁殖へ向けた砂浜上陸設備を整えました。

[公開日] 2019年7月13日



TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石  
古生物／レプリカ・復元模型  
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745

http://www.tokyo-science.co.jp

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

## 寄附の受付について

.....  
全科協の活動を支援いただく寄附を随時承ります。  
.....  
申込み、お問い合わせは全科協事務局までご連絡  
.....  
ください。  
.....

みなさまのご支援ご協力をお待ちしております。  
.....

## 掘り出せ 大地の宝



採集風景

平成15年から行われている、当館の人気イベント「琥珀採掘体験」です。実際の中生代白亜紀9,000万年前の地層から、琥珀を採掘します。1時間という限られた時間の中で、アイスピックとシャベルだけをお供に広い体験場を探し出していきます。恐竜が生きていた時代の地層なので、中には化石を探し求めに来る方も。昨年6月には、ティラノサウルス類の歯の化石が発見されており、これから来る方も、世紀の大発見が期待できるかも？



次回執筆者は、岩手県立博物館 望月 貴史さんです。

## 第27回研究発表大会

### 事例発表者の募集について

令和2年2月14日(金)にオーテピア・高知みらい科学館にて開催する第27回研究発表大会での事例発表者を募集します。

今回のテーマは「博物館の社会的役割を考える～持続可能性の視点から(予定)」です。活発な情報交換の場となるよう、自館の取り組みや課題など是非ご紹介ください。

応募は口頭発表、ポスター発表とも11月11日(月)までに、事務局宛メールかFAXでお申込みください。

詳しくは、10月上旬に各加盟館宛に郵送しました募集要項をご覧ください(全科協HP<<http://jcs.jp/>>でも募集要項をご覧いただけます)。みなさまのご応募をお待ちしております。



全国科学博物館協議会

#### 全科協ニュース編集委員

- 井島 真知(バルナール・ビュフェ美術館学芸員)
- 大島 光春(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
- 西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団  
科学技術館運営部主任)
- 島山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
- 平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(主幹))
- 弘田 澄人(かわさき宙と緑の科学館天文担当係長)
- 濱田 浄人(国立科学博物館連携推進・学習センター  
連携推進課長)

#### 全科協事務局

- 国立科学博物館  
連携推進・学習センター 連携推進課  
(担当:南部・片波見・苫米地)
- TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898  
info@jcs.jp
- 発行日 2019年11月1日
- 発行 全国科学博物館協議会 ©  
〒110-8718  
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
- 印刷 株式会社セイコー社